氏　　名	岡西　幸恵
学 位 の 種 類	博士(看護学)
報 告 番 号	甲第 112 号
学 位 記 番 号	看博第 48 号
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	再発・転移がんサバイバーの療養生活における調和に関する研究 Research on Harmony in the Lives of Recurrent and Metastatic Cancer Survivors during Recuperation
論 文 審 査 委 員	主査　教授　藤田　佐和　(高知県立大学) 副査　教授　長戸　和子　(高知県立大学) 教授　池添　志乃　(高知県立大学) 教授　瓜生　浩子　(高知県立大学)

論文内容の要旨

〔研究目的〕再発・転移がんサバイバーの療養生活における調和がどのようなものであるかを明らかにすることである.

〔研究方法〕質的記述的研究デザインである．再発・転移がんサバイバーを対象に半構造化面接を行い，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した．本研究は，高知県立大学・研究協力施設の倫理委員会の承認を得て実施した.

〔結果・考察〕研究参加者は 30～70 歳代の 16 名（男性 6 名，女性 10 名），再発転移の回数は 1～5 回であった．分析の結果，46 の概念が生成され，最終的に 6 カテゴリーと 1 コアカテゴリーを見出した.

再発・転移がんサバイバーの療養生活における調和は，『ニュートラルな自分で生きる』を中核に据え，【変わりゆく状況に自己存在が揺らぐ】から【死を傍におき自分軸をもつ】【がんは自分の一部である】【自己の拡がりに気づく】自己認識の拡大プロセスであった．これは，【今あるものに意識を向ける】【安定した自分を確保する】方略との相互作用により支えられ促進されるものであった.

『ニュートラルな自分で生きる』は，がんの診断・治療に伴い変化する自己や周囲の状況に左右されないフラットな心をもち，揺るぎない自分を保ちながら柔軟に生きる状態である．これは，診断と治療を繰り返すなかで生じる絶え間ない揺れに対峙するための自己の在りようで，がんや治療による悪化と回復を行き来するたび，本プロセスが循環することで強化されるものであった.

本プロセスにおいて，再発・転移がんサバイバーは，がんの診断や治療のたび【変わりゆく状況に自己存在が揺らぐ】なか，【死を傍におき自分軸をもつ】今に身を置いた生き方を見出し，自分の生きる道を定める特徴があった．また【今あるものに意識を向ける】【安定

した自分を確保する】方略により，がんや治療の脅かしにとらわれない心地よい日常を築く特徴があった．そして，【がんは自分の一部である】【自己の拡がりに気づく】ことにより，自己理解を深め，自己への信頼を高める特徴があった．これは，自分の軸となる生きる道，心地よい日常の構築を支え促進させ，さらなる自己への信頼を高める推進力となるものであった．

以上より，再発・転移がんサバイバーの療養生活における調和は，「がんの診断や治療による悪化・回復のたびに揺れ動く自己存在を認識するなかで，“ニュートラルな自分で生きる”在りようのもと，死を傍において自分軸をもち，安定した自分を確保しながら揺れを収め，自己の拡がりを感じられる日常を獲得する状態」と定義した．

看護実践として，再発・転移がんサバイバーの『ニュートラルな自分で生きる』在りようを見出し支えること，【変わりゆく状況に自己存在が揺らぐ】ことを念頭に，【死を傍におき自分軸をもつ】生き方を支えること，【安定した自分を確保する】方略を積み重ねながら【自己の拡がりに気づく】日常を獲得できるよう，自己認識とコントロール感覚の回復・拡大を促し，対象にとって最良な健康を保つ療養生活を支えることの必要性が示唆された．

審査結果の要旨

再発や転移を繰り返しながら療養生活を送っているがんサバイバーは、幾多の困難な状況に直面しても、自分らしい生活を取り戻そうとしている。本研究はその現象は「調和」という概念で捉えることができるのではないか、そのようながんサバイバーに対して、「調和」の視座で支援を行うことが重要ではないか、という研究の問いを発展させた挑戦的な研究である。調和の概念はさまざまな学問領域で用いられているが、いずれの領域においても概念定義は明確ではないため、概念分析を行ったのち研究課題に取りくんでいる。

本研究の独創的な点は、再発・転移がんサバイバーが厳しい状況に直面しながらも自分らしい生活を取り戻そうとしている現象を調和の概念で捉え、対象者の語りを丁寧に緻密に分析し、説得力のある結果を導き、これまで明らかになっていなかったニュートラルな自分で生きるという状態を記述し、再発・転移がんサバイバーの療養生活における調和の概念定義を行ったことである。

再発・転移がんサバイバーの療養生活における調和は、『ニュートラルな自分で生きる』を中核に据え、ニュートラルな自分で生きる在りようのもと、近づいては遠ざかる死を傍におき自分軸をもつ生き方を基盤にして、安定した自分を確保する方略をとりながら、度重なる診断・治療の影響を受けて自己や周囲との関係の中で生じるゆらぎを収め、新たな自己理解や成長など自己の拡がりを感じられる日常を獲得する状態であることを見出した。新知見であるコアカテゴリー『ニュートラルな自分で生きる』は，「がんや治療による心身の変化を柔軟に受け入れ対応できる揺るぎない自分を保つ状態」であり、これは、診断と治療を繰り返す中で生じる絶え間ない揺れに対峙するための自己の在りようで、がんや治療によ

る悪化と回復を行き来するたびに前述のプロセスが循環することで強化されることである。

また、再発・転移がんサバイバーは、プロセスの循環を通して、１．繰り返しがんの診断や治療のたび【変わりゆく状況に自己存在が揺らぐ】なか、見え隠れする【死を傍におき自分軸をもつ】今に身を置いた生き方を見出し、自分の生きる道を定める、２.【今あるものに意識を向ける】【安定した自分を確保する】方略によりがんや治療にとらわれない心地よい日常を築く、３.【がんは自分の一部である】【自己の拡がりに気づく】自己認識の拡大は，自己への信頼を高めるという 3 つの特徴を明らかにしている。さらに、看護実践として、再発・転移がんサバイバーの『ニュートラルな自分で生きる』在りようを見出し支えること、【変わりゆく状況に自己存在が揺らぐ】ことを念頭に、【死を傍におき自分軸をもつ】生き方を支えること、【安定した自分を確保する】方略を積み重ねながら【自己の拡がりに気づく】日常を獲得できるよう自己認識とコントロール感覚の回復・拡大を促し、対象にとって最良な健康を保つ療養生活を支えることの必要性を示唆している。

本論文は、再発・転移がんサバイバーの生き方や QOL を支える視点の転換、がんサバイバーの健康を支える探究をさらに発展・深化させることに貢献する可能性を示しており、普遍性、新規性、独創性を備え、看護学分野のみならず、社会生活を営むがんサバイバーへの深い理解と QOL や共生社会に向けて貢献する研究に発展すると評価した。

以上のことから本学位審査委員会は、博士論文審査基準 6 項目を踏まえ、次の結論に達した。本論文は、研究テーマの着眼点、独創性、研究への着実な取り組み、丁寧な分析過程、結果の新規性、論理的な論証による考察、研究成果の実践への有用性に優れ、がん看護学発展への学術的価値があると結論づけ、博士（看護学）の学位授与に値する研究成果であると判断した。